

報告⑦

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

町の課題にもとづいた高校魅力化との協働(奥尻町役場水産農林課)

青山学院大学 樋田 大二郎

奥尻町役場水産農林課の満島章課長と横田稔主幹へのインタビューでは、冒頭で奥尻島は水産業も農業も変わろうとしていることが語られた。とりわけ、高齢化が進んでいることが課題となっている。現状は若い人を引き留めるだけの魅力が発信されていないという。卒業生の水産農林の分野での雇用機会(お二人は「受け皿」という)は、ハードルが高いと認識している。例えば漁業だったら、一人親方が多いなどの課題がある。また、いわゆる新規事業を作っていくような仕組みが島の中にはまだあまりできていないという。

地域人材像については、お二人は奥尻島の産業の変化を踏まえて、地域人材像を描いている。卒業後にいったん外に出てその後戻って来ることを前提にして次のように地域人材像を語った。水産業では最先端の漁業や機械などの今までにない漁業の仕方を学んできてもらって

それを地域に浸透させる地域人材や、販売に精通している地域人材である。農業では生産したものを加工して流通させる六次産業を起業する人が必要なので、それを町全体として行えるようにする地域人材である。

水産農林課が高校との協働に至った経緯を尋ねたところ、平成五年の北海道南西沖地震の二年後の平成七年のスクーバダイビング(スキューバダイビング)の授業以来の協働であり、歴史を重ねてきたが町立移管のあとで、高校との関係が一気に深まっているという。

これ、町立の高校になったっていう意味だと思います。それで教育委員会の方が所管にはなるんですけど、今までは支援してい



うお金だけのつながり。補助金っていう形での関係から、やっぱり町立っていうことで、……自分たちの高校っていうわけじゃないんですけど、それで携わることが多くなったりとか、前から父母会もありながらなんですけど、大体OBの方々も役場にいたりとかでそういうのかな……。やっぱり町立で身近になったのかな。ここをなくすわけにいかないというのもありますけどね。(インタビューより)

高校と役場の協働の中で、お二人は奥尻高校が熱い思いを持っていること、いろんな工夫をしていること、さらに生徒も教師も取組の中で成長・変化していることを感じている。

お二人は島で育った子が、意外に島のことを知らないということも感じている。

やっぱり学校っていう大きい括りの中で、そんなに深くは携わってなかったんじゃないかなと思います。高校になるとやっぱりグッと違いますよね。それを授業として考えるということをやっていることなんです。そういう意味では違うと思います。(インタビューより)

お二人は高校と地域の協働の中で生徒の成長を感じるようになる。お二人の話で印象深かったのは、生徒が成長したと思うのはどんなところを見てどういうふうにな成長したと思ったかを尋ねたときである。

(一年目は)聞いただけだったのが二年目になると自分たちから

わかんないことを当然また聞くんですけど、こうした方がいいんじゃないかっていう提案をちゃんと言ってくれる。現状をちゃんと知って、どうしてこうなったのか疑問に思ってくれるっていう……町おこしワークショップの中で僕ら考えを引き出してあげれば良いと思うので、そういう形のやりとりになります。一年目はやっぱり何もわかんない中で、ただ一方的に聞いただけかもしれないですけど、二年目になったら疑問に思うことを考えられて、それをちよつと僕たちに話してくれるっていうのがすごい成長だと思えます。(インタビューより)

お二人は奥尻高校の教師との間では次のように協働の関係が築かれてつとあると認識している。また、お二人は高校生を支援したいと考えている。ひとつには、島留學生が来たことで、奥尻高校には魅力があるのだと気づかされたという。もうひとつには生徒への関心が高まったという。たとえば、高校生が自分たちでは思いつかない素晴らしいことを考えてくれることがあり、実現させてあげたいという思いになると語った。

「なんで俺たちの言ったことやってくんないの」っていうぐらいの気持ちで言ってくるので、何でもいいからとりあえずよく話し聞くと、僕らの視点では思わない素晴らしいことを考えてくれることもあるんですよ。(インタビューより)

形がドストレートに同じもんじゃないやなくてもいいので、君たちのヒントがこうなったんだよっていう物を僕らは何かやってあげた

いっていいのはいっぱいありますね。「(漁師になりたいという島留學生に対して) なりたいと思ってる子に全精力注いであげられるようにしてあげたい気持ちがあります」(インタビューより)

と語った。また、今はそれまであまり気にならなかった卒業生の進路が気になるようになったと述べた。そして、全国募集については、奥尻での高校生活が気に入って入学してやることを知ったので、奥尻高校の魅力を教えたいという。

1 奥尻町の地域活性化の状況

——この町の地域活性化の状況を水産農林課の視点から見てどのように見ておられるか。そのことからお願いいたします。

横田稔主幹：水産的な部分でいくと今、やはり組合、漁業協同組合なんですけど、漁師の人が二〇代以下っていうか二〇代を割る人が一人つという中で、もうほぼ六〇代の方々が漁業支えて頑張つて、水揚げに貢献してるっていう状況です。ただ、頑張つてるその方々があと五年、一〇年やつてつても、だんだんと漁業に携われなくなった時には、やはり今のうちから若い人方が経験を積んでいかないと島の漁業は成り立たないっていう状況だと思います。一時期は、若い方々もちよつとずつ入ってたんですけど、その方々ももう三〇代から四〇代という中堅クラスまでなってきたりもんですから、新たに若い人方が、島の中での若い人方がどんどん増えていけばというところが漁業の状況でこ

ございますね。

満島章課長…農業も同じように高齢化の状況です。奥尻の農業は離島農業なので、ほかのところとはちよつと違って小規模なんですけども、漁業より、もつと人数も少ない中で一七戸の農家さん。そんな中で漁業よりもつと高齢化してて、多分漁師の方が五〇代、六〇代。農家の方は六〇代、七〇代つていうちよつと一〇歳ぐらい年齢が高いから同じく担い手がいなくていいことで、若い人たちで五〇代。そういう人たちが今、頑張れるうちに農業の仕組みを今のうちに取り組んでいかないと。

さつき言ったように漁業を担う人が減っているのと同じで農業も減っていく状況があります。農業の活性化で言うと、担い手という部分で高校生がこれから島に残っていく。そういうことになるのかなと思つています。

——島に残つてほしい。あるいは、島で活躍してほしいというところなんですけども、今現在農業や漁業の跡を継ぐ若手がいなくていいこととは、農業、漁業がこれまでと同じでは難しいというふう理解してよろしいでしょうか。

横田主幹…そうですね。漁業でいうと、私も子どもどもの頃からでも、親が漁師であっても、自分が苦労したぶん、子どもには漁師やめて違うところはどうだつていう話をされてたような時代があつたりしました。しかし、そこからでも親の姿を見て、後継として残つてくれた子ども方もいます。

やっぱりそこですかね。まだ残る、引き留めるだけの魅力が発信されてないつていうところにもなるかなと。

——子どもの頃と言つことですが、横田さんは今、何歳ぐらいになるんでしょうか？

横田主幹…私ですね。四五になります。そうすると、二三年。平成五年から役場に入ったんですけど、大団災害の時間がちよつと転機になつて、皆さん漁業で言うところでもうやめてしまつという方々が出て、そこがちよつと転機になつたかなと思つています。そこから復活するまで時間がかかりました。その間で漁業つながら子ども方は違うところで就職とかそういうのが多かつたんではないかなと思つられます。

——農業は。

満島課長…農業に関して、やっぱり新しく始めるつていう方はいなくて、自分の親がもともと農家だつたりとか、そういうところから今の年配の方たちもそのまま続いていっただすよね。で、今農業をやつていて人は、新たに新しいものに取り組むつていう時世でない農家さんが多くて、今例えば田んぼ、お米をやつているのであれば、自分で今耕してる田んぼがあつて、お米が取れるから八〇代の方であればそこがあるので、やめるわけにもいかないし、やればやれるからやつてるつていう形です。五〇代の方たちつていうのはやつぱりまだまだ元気な方もいるので、お米だけじゃなくてアスパラとか、肉牛。牛もやつてるんですけど、そういうところでちよつと複合経営しながら別の仕



事も持つて、例えば土木建築業の仕事も持つてたりとかしながら複合的にやってる方もいます。それが奥尻の農業の事情なので、なかなかそこに新しく雇用を作れるというのはなく、最近ワイナリーの部分で若い方であったり、道外や海外、島外から来る方を受け入れて雇用につなげてるといふ点があります。

——奥尻小学校さんが果樹園をお持ちですけども、あれはそういった新しい農業のこともある程度視野に入れてのことでしょうか？

満島課長…そこまではきつと、そこに長期的な視野はきつと持つてないとは思いますが、やっぱり地元にある土地柄。そういう生き物というか、農作物に携わることでそういう関心を持つてもらえるという点で果樹園を持つてたり、あと田んぼも青苗の方の学校では田んぼ借りて、そこで少しはお手伝いをしたら米収穫するとかそういう教育を行っています。しかし、長期的に言う後継者にまでつていうスパンではないのかなと思います。ただ、町のその作業に関心持つてもらおうという点で、授業に取り入れていると思います。

2 今後、奥尻島で必要とされる地域人材とは

——水産農林課さんの視点から見て、今後必要とされる地域人材はどのような人材ということになりますか？

横田主幹…今、漁師の人は年配の人は昔ながらの漁の仕方し

かできないっていうところが一番大きいと思うんで、やっぱり最先端から機械いじりからそういうのを今までにない漁業の仕方っていうのを学んできてもらって、それで地域に浸透させてくれればもつと今の漁業の人方も楽に漁できたりとか、楽に水揚げが揚がったりとかそういうところをやっぱり年配の方たちに教えていけるっていう方々が来るとやっぱり漁業はもつともつと今から脱却できるのかなっていうところはありますね。

——地域によっては、流通を変えることで漁業を振興しているところもあると思うんですけどもそのへんの地域人材はいかがでしょう？

横田主幹…そうですね。今、奥尻町では地域政策課の方でも、流通関係とかも担当しているんですけど、うちの方だとやっぱりフェリーとかで漁獲物を運ばなきゃいけないとか、その後の販売網とか、組合自体が販売に携わってるんですけど、やはり販売に昔から強くはないっていうところで、漁業者の方々も物かもつと高く売れば、当然もつと漁獲が少なくて、資源管理しながらでも大丈夫だし、多く取れた時は多くお金も入ってくるというところで、やっぱり販売の問題は、漁業者も何とかできないかっていうところは多く話が出ます。やはり販売として組合として動くにあたっては、漁業者のものを全部捌けるような形の態勢しか取れないのかなっていうところは現状かなと思います。販売に精通してて、販売網でちょっとでも高くとかできていければ多く捌いてっていう。そういう方々も必要とされてると思いますね。



満島課長…今は、六次化って言って自分たちで獲った物を加工して、全部それを自分たちで流通して、ずっと全部やれるような仕組みがあります。ちょっとそこまでセットしてるところっていいのはなかなかね、全体的には浸透しないよね。やれている方もいるんですけど。それも大きく町全体で浸透させているかって言ったらそうじゃないな。

——ここで育って外に一旦出て、Uターンで戻ってきて何かをやってもらえたらと思うんですけども。

横田主幹…そう思いますね。そう思います。ただそういうためにやっぱり地域で馴染んでないと戻ってこれないと思いますので、お世話になったとか恩返しに帰ってくるのかやっぱりそういうのがあると帰ってきやすいのかなっていうのはあります。

——今、おっしゃった言葉の中で地域に馴染んでいるとかお世話になったなという部分を別の言葉で表すとどんな若い人たちについていうことになるでしょう？

横田主幹…今だと、きつと高校生だと島外から来てて、島親とかっていう形で親代わりとかをやったりもしてるみたいですので、その中でやっぱり島のお父さん方に戻ってきたら恩返しっていう形かなと思います。それは島外から来てる子方だと思います。あとは、島の子ども方にしてもやっぱり地域の例えばお祭りに出て楽しんだのがあったりとか、島がちよっと大変だよってことになることやっぱり島のために、もしかしたら大企業に就職してて、偉くなって、島のために何かした

いなくなっていう心を持っててくれるかもしれないと思いますので、そういう些細なことからもやっぱり高校生もやっぱり祭りなど地域行事にも参加したり、ボランティアもしてくれたりとかして、みんな一緒にやったりしてると思いますので、そういうのからかなと思います。

——将来が楽しみです。農業でも同じようなことがありますか。

満島課長…そうだと思います。同じです。例えばワイナリーでいらっしゃる方たちっていうのは、どこかで経験を積まれてくる方もいるんですけどもやっぱり奥尻のやり方と向こうのやり方が違ったりとかして、「島じゃこうなんだ」とかそういうふうに思われる方もいたりとかする中でいくとやっぱり一回島に来てみたいっていう思い。来てみてさっき言った馴染む、馴染まないもあるでしょうから。そういうカテゴリーの中にそういう農業がもし組み入れられるのであれば、ぜひそれをきっかけに求めてもらいたいとか、あとは残ってもらいたいと思いますけどね。

3 地域にとつての高校と協働する意味

——今、協働という言葉を使っていますが、昔は高校が地域を利用して、教育を良くするという言い方だったんですけど、今は高校が町が元気になるのを支える、あるいは高校が町と一緒に元気になっていくという意味で協働という言葉を使います。高校と協働することについて町の立場からはどのような意義を感じていますでしょうか？

横田主幹…こうなるとより一層、身近に何かやるっていう感じかな。押し付けてなくて。そういう感じに思いますね。

満島課長…今、高校といろいろやっているのは、高校が授業の中に地域の人を呼んで町おこしワークショップっていう形をとっています。中に当然、観光もありますし、いろいろあるんですけどその中に漁業だったり、農業だったりがあります。そういう分野の中で興味を持っている子どもたちが実際に島の現状を聞いて自分たちの思うことを、さっき横田からも言ったんですけど、何ができるかっていうことを考えてそれを提案します。

実現するかしないかはさておいて、そういうふうに分たちだつたらこうしたいっていうふうな考えを持っていける。そういう考え方ができる授業って今までなかったんですね。

それが今、続きますので、一年生から例えば島留学生であれば奥尻のことって何もわかんないで、高校が好きで来てるんですけど、そこでちょっと知ったことで、奥尻のことはもちろん深く知って、二年生になるとさらにもっと深く知って、三年間で地域のこと学べると思うんで、そういう意味では町おこしワークショップっていうのは面白いと思います。一年目でやった子と二年目に同じ子と会うことがあるんだけど、やっぱり違いますね。成長の度合いが。

——成長についてお伺いしたいのですが、例えばずっと島で育った子は島のこと知ってるはずだとも思うんですが、いかがでしょうか。

満島課長…意外に知らないと思いますね。やっぱり学校っていう大きい括りの中で、そんなに深くは携わってなかったんじゃないかなと思います。高校になるとやっぱりグッと違えますよね。それを授業として考えるということをやっていることなんで。そういう意味では違っているとします。

——成長したと思うのは、どんなところを見て、どういうふうな成長したというふうな考えましたでしょうか？

満島課長…単純に言うと、(一年目は)聞くだけだったのが二年目になると自分たちからわかんないことを当然また聞くんですけど、こうした方がいいんじゃないかっていう提案をちゃんと言ってくれる。現状をちゃんと知って、どうしてこうなったのか疑問に思ってくれるっていう。疑問に思うということは多分何か自分の中ではモヤモヤしたところがあつて、もうちょっとこうしたらいいかもねっていうのなんで。

町おこしワークショップの中で僕ら考えを引き出してあげればいいと思うので、そういう形のやりとりになります。一年目はやっぱり何もわかんない中で、ただ一方的に聞いただけかもしれないですけど、二年目になったら疑問に思うことを考えられて、それをちょっと僕たちに話してくれるっていうのがすごい成長だと思います。

——ちなみにその提案とか疑問というのは、高校生ですから外的な部分もあると思うのですが、満島課長さんの視点から見ると、その提案をどんなふうな思いましたか。



満島課長…僕らは一個でもいいからやってあげたいなって思いますね。高校生は、非現実なことを考えているとは思っていないんです。やるんじゃないかなと思ってるんです。二年目とかになると「なんで俺たちの言ったことやってくんないの」っていうぐらいの気持ちで言ってくるので、何でもいいからとりあえずよく話し聞くと、僕らの視点では思わない素晴らしいことを考えてくれることもあるんですよ。

横田主幹…子ども方はやっぱりお金抜きとして自分の構想をそのまま話してくれると思います。うちはもう最後にはお金のことを考えながらの発言になりますから。そこがまず子ども方は違う感じかなと思います。そのせめぎ合いは面白いですよ。高校生は最後になると「お金がないと何もできないんですね」って話にもなりますし、でも僕らはそういうこと求めてないので。お金があったらやってあげたいですっていう話になりますし。

— お金がないとできないというふうになってしまっただけで終わってしまう？

横田主幹…何も終わってしまうんで。

— 多分、新しい産業が興る時っていうのは、労力と頭で解決するのだと思います。東京の工場でやることと同じことをここでやってもらういくはずないです。ということ、この島でできること、高校生たちがこの島に合った何かを提案できるようにすると学校教育的には、

いいとこまでいくのかなと思うんですけども。

横田主幹…あとは考えただけで終わらないようにほんとに一つでもそれを完成させたいけど、行政はやっぱりそこ考えるんですね。よく話するのは。

満島課長…形がドストレートに同じもんじゃなくてもいいんだから、君たちのヒントがこうなったんだよってという物を僕らが何かやってあげたいってのはいいと思いますね。

横田主幹…ほんとに、やった結果、次、何かを変えなきゃっていう、子ども方も次のステップになると思うし。

満島課長…中には旅行会社にそのまま持つてたら商品になるんじゃないのかなっていうぐらいのものもあったりとかしますよ。発想で。というところは、もう僕らよりもずっと考え方が純粋に考えてくれるところもある。どんどん入ってきたから、やるだけ楽しいですね。

—あと、若い人に売れるものは、やっぱり若い人が考えたほうがいかもしれませんか。

横田主幹…それは。売れ筋はそうですね。

満島課長…ほんとそうだよ。

4 水産農林課が高校との協働に至った背景と経緯

—それでは、高校と協働するに至った背景とか経緯とかを教えてくださいいただけますでしょうか？

満島課長…これ言ってたのは、担い手。

横田主幹…そうですね。やはり一番最初のところでいくと、町の方でまず人材を育成しようっていう勢いでスクーバ（スキューバダイビング）授業で協働しました。高校は普通科高校ですので、高校ではなかなか単独ではできない中だったので、町の方でインストラクター呼ぶお金とかを支援して、それからスクーバ授業ってというのが始まって。

横田主幹…平成の災害後かなと思います。

満島課長…七年か。

横田主幹…そのあたりから一緒にやっていくような形になっていくのかなと。それでようやくうちも一年、二年前に担い手協議会っていう協議会を行政的な要素なんですけど、そういうのを立ち上げて、いろいろ高校生の活動の報告やら、担い手的なところで農家だったら農家の体験とかを高校生全員に報告してもらったりとか、そういうのかなと思います。まず、スクーバから始まっているっていう感覚です。

満島課長…スクーバ授業が今に至ると島留学生の方たちが来る一つの決定理由になったりとかしてるところもありますので、奥尻の魅力だったのかなって思います。

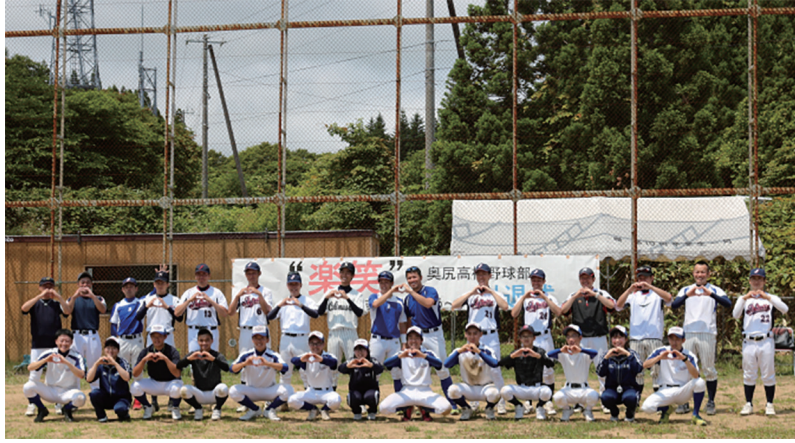
——地域未来留学フェスタというのが去年から全国規模で始まっているんですけども、スクーバダイビングのポスターがすごく目立っていました。

満島課長…青いですね。

——私には印象的でした。教頭先生から話を聞いたところでは、町立移管したあたりから、またこのスクーバダイビングを支援するシステムが発展したというふうに向っています。

横田主幹…これ、町立の高校になったっていう意味だと思います。それで教育委員会の方が所管にはなるんですけど、今まで支援っていうお金だけのつながり。補助金っていう形での関係から、やっぱり町立っていうことで、自分たちのつていうわけじゃないですけど、自分たちの高校つていうわけじゃないんですけど、それで携わることが多くなったりとか、前から父母会もありながらなんですけど、大体OBの方々も役場にいたりとかでそういうのかなとは。やっぱり町立で身近になったのかな。ここをなくすわけにいかないというのもありますけどね。





満島課長…気になる。気になる一つで。

横田主幹…町立っていう。

— 気になる度は変化しましたか？

横田主幹…われわれの事務的にはそうだよ。関わることは多いと思いますね。あと、島外から来る子も関心持って来ている。もともといる子たちは島に残る子も出る子もいるっていう中で残る子もいるんですけど、島外から来て、奥尻高校の授業をやりながら高校生活をやってきたっていうふうを考えていると知ったら、奥尻高校は相当魅力があるのだなということを逆に気付かされました。町立移管されてから、そこに気付かされました。

今まで高校生がどこに就職するのとかってあんまり気にしなかったけど、最近だとあれかな。どこに行ったとか、島に残ろうとしているとかさ。そういうのもちよつと気にするようになってきたかなど。

— 次の四月から、町おこしの子たちが就職、進学を始めるわけですか？

満島課長…そうですね。一期生がね。今年の三年生がね。それで留學生の子では島に残る子はいないのか。いなさそうですね。

横田主幹…最初から少ないグループだよ。

満島課長…でも、気になります。すごいお仕事好きになってますよ。その子たちは。

——昨日、生徒さんにインタビューをしました。面白いのは奥尻のと好きだという言い方が、島外から来た生徒さんの場合は「この町は故郷だから」と言うのとは違う言い方でこの町が好きだというふうに言っていて、島外から来た人の奥尻愛というのは、もともと地元で育った子の奥尻愛とは少し違うように思いました。

満島課長…違うと思います。

5 協働の体制・組織・運営

——それでは、今現在の協働の体制とか、組織とか運営について教えてくださいいただけますでしょうか？

横田主幹…これはでも、高校から直に課長の水産課長の方との連絡もありますからね。

満島課長…体制としては組織図とかいろいろ決まりごとはあるんですけど、やっぱりお願いごとに関しては学校から直接。われわれもそういうふうにしてこれという言い方してるんですけど、ほんとに困ったことだったり悩んだことがあったら何でも聞いてもらって、できる範囲であれば一緒にやってみてくってという感覚なので。

横田主幹…そこから窓口になっているものたちもあります。今、電話しやすいなだわ。きつと。そこからうちの方で行政内で調整をかければとかそこにはなってるかなと思ってるんで。

——あと、島の人を紹介するようなこともここが窓口になるわけですか？

満島課長…どうでしょうね。きつと、教育委員会の島おじだったりとかそういう制度でやってるんですけど、われわれは今水産の部分だけとか、担い手の部分だったり、町おこしワークショップだったり、関わるとなれば水産関係とか第一次産業が多いので、そういうところに何か学校で関わってみたいってなったらダイレクトで来るっていうのが多いですね。

横田主幹…うちから人の紹介とかつてなるとやっぱり漁業の体験、農協の体験になれば漁師さんとか農家さんかなと思う。

満島課長…そういうの紹介するのは僕たちが役割で。

横田主幹…そういうのがあってそうですよね。きつと。

満島課長…先生方も若いからみんなほんとに興味持って一生懸命やってくれるんで。

——若い先生が直接電話掛けて来たりしますか？

満島課長…来ます。

— あつという間の成長ですね、先生方。

満島課長…携帯電話でも来ますよ。なんでも電話くれて。先生方よく言うのが、なかなかきつとそれが大きい学校だったり、向こうの学校に行くときつところはならないって思いながらやってますよね。きつと奥尻だからできるんだなって自分たちで思いつつも、ちゃんと高校の良さとしてそこをちゃんと。

横田主幹…忙しいだろうけどそういう課題を預けられてこなすという先生方も成長しなきゃいけないような新任の先生っていうのはさ、そういう若い先生多いからそういう流れだと思っわ。

— 新任の先生が来て、先生成長したなと思うようなところはありますか？

横田主幹…多分、今二六、七歳の先生ですら中堅になってますから。三年から四年ですね。そこ新陳代謝が結構激しいと思うんです。学校の中で、その中でちゃんと回っているっていうか、先生方がみんな一生懸命なんだと思いますけどね。

満島課長…それぞれが分野が与えられて課題を解決っていうわけではないけどさ、そういうのができてるっていうのが成長。うちらから先

生方の成長見るわけではないんだけど。きつと校長先生方、教頭先生方にするのとそれだと思っわ。やってもらって、やらせて。そしてそれが。やらせてると思います。完全に。だから教頭先生から例えば頼みにきて、親代わりじゃないですけど、頼みにきて、こういう先生が行くのでよろしくっていうことはないです。直接若い先生が(連絡してきます)。

— 先生方でもっと地元を知りたいとか、先生たちなりの地元愛みたいなのが。

満島課長…多分さっき言った町おこしワークショップとか、先生方、多分一緒に授業受けてると思うんですけど、先生方きつと言葉には言わないけど、初めて知ったこととかいっぱいあると思います。「そうだったんだ」とか。だから子どもたちと一緒に学んでると思いますよ。

横田主幹…先生方みんな聞きに来るもんね。空いてる先生方全部入ってるんですよ。あれきつと。

満島課長…こないだ言ったのは、林業も島にあるんですけど、自分たちで林業を知らないのに、生徒に「島の林業支えろ」って言ったって支えれないし、農業だつてそうだし、漁業だつてそうだし、そこは一緒に子どもたちと考えてるんじゃないかなって感じしますけどね。ただ、大学卒業したばかりで、都会から来て島のこといきなり知ってた言つたってそれはもう全然もう授業教えられるかもしれないけど、地域のこと教えるっていうのはもつとエネルギーがいたり、人を知

らなきやいけないことになると思うので。そこをやらされてるっていうか、もう任せられてるんだからすごいなと思います。先生方ももしかしら島を出ることは絶対あると思うけど、違うところに行ったら、感じることはあると思いますね

6 ご苦労されている点

— それでは、ご苦労されている点について。

満島課長…何かある？

横田主幹…やっぱり……。

満島課長…成果に結びついてないっていうのがあると思う。

横田主幹…高校生の受け皿が少ないって言うんですかね。例えば漁業だったら、一人親方が多いもんだから、

満島課長…漁業の仕組みね。

横田主幹…雇ってやる漁業っていう感じでないんで、それが例えば島に残りたいって高校生が言ったとしても、そしたら何の仕事に就いて残っていけるかっていうその受け皿が少ないっていうのがやっぱり一番かなど。受け皿を用意するための苦労があると思います。



満島課長…今でも完成されてないもんね。

横田主幹…そうなんですよ。これから受け皿ちよつとうちらも限界があるしな。どこまでできるかっていうのでやっぱり結果的に。

満島課長…留学生とかも例えば漁師になりたいって言った時に、ハードルがいくつか生まれるんですよ。それが今、ハードル全部に取り組まないといけない状況があったりとか。そういうところはちよつとあるよね。

横田主幹…ある。ほんとに島の中から求人出すのもほとんどないような状態だと思うから、そこを出せれるように障害取り除くっていうのがちよつと今まだできてないかなと思いますね。

—そうしますと、いわゆる新規事業を作っていくようなあるいはスタートアップと呼ばれるようなそういった仕組みが島の中にはまだあまりできていない？

満島課長…少しでき切れてないと思いますね。

7 うれしいこと

—わかりました。次にご苦労されていた点の反対側をお聞きます。一緒に協働して良かったな。島にとってプラスになってるなと思うところ、あるいは担当者としてうれしいなと思うようなことがありますで



しょうか？

横田主幹…いいことの方でいくと、高校があるだけで、町の中で若い者がいるっていうこと自体。それじゃないと夕方になれば人っ子一人歩かないような状態だからさ。

あと、病院に行くようなおばあさんがバス停にいるようなとかそういう中でやっぱり高校生がバス停にいただけでも、やっぱりちょっとでも活気の面が見えてくるのかなというところがまず一つかな。些細なことでもそれでもそういうのからっていうような、そこがまず一つかなとは思っています。

満島課長…高校が地元に残るっていうのは、中学校までと全然違う。特に離島だと顕著にそこってわかりやすいと思うんですね。

もし中学校だけだったら、若者が高校行く時に島外に行っちゃった時点で、これだけでも地元に残る若い人たちっていないんだなっていうことになります。高校があるだけで三年間の中でもうちよつと島の中のこと考えることができたりとか、それが直接的に響かなくてもさっき言ったようにいるだけでも、イベントに子どもたちがいるだけでも、大人が考えたことにいるだけでも活気があり、自分たちが考えたことやるだけでも活気があると思うので、これはもう大事なことだと思えます。見るもんね。子どもたちいろいろなところだね。会うしね。

——ちなみに高校生たちは多分町の人が自分が誰かを知ってるというふうに思っていますか。

満島課長…思っていると思いますよ。

——少なくとも住んでるところの周りの人は、仮に島外からきた生徒でも…

満島課長…うん。どここの子だなというのは別として、そうじゃなくても高校生、地元の高校生で留学生の子だなって。

横田主幹…そうだね。名前までいなくてもね。

——授業サボったりしたらすぐ情報が伝わるんじゃないかと。

横田主幹…そういう暇もなさそうだもん。高校生。

満島課長…今の高校生忙しいですよ。

横田主幹…課題が多くて。

満島課長…俺たちは奥尻高校卒業だけど、俺たちのころとは全然子どもたち違うなと思います。忙しいよね。

横田主幹…そう思うな。

満島課長…いろいろやってるなと思うもん。

——ちなみに満島課長さんのところは何クラスあつたんですか？

満島課長…僕の際は二クラスでした。二五人ぐらいが二クラスか。

横田主幹…多めっていうかあれだね。

——そうすると、中学校から高校に行く人が五〇人だと。

満島課長…そうですね。オール島内ですね。

——でも、課長さんの感覚からすると、生徒数は減ったかもしれないけども、賑やかさは今の方があるということでしょうか。

満島課長…見てるといろんなことやってるなっと思えますね。町の人たちに顔出す機会が多く感じますね。

——よく言われるのは、町の活性化という時に、人口増だけを考えてしまうとあまり良くないと。人の口の密度のほうの人口密度を高くするのは難しい。そういうのをねらわずに人が交わる密度のほうの人口密度が高くなる方が先だと。まさに今、奥尻高校さんがやってるのはそういうことなんだと思います。あと、この役所も元気ですよ。全体に。

満島課長…元気なのかな？

横田主幹…だいぶ人も昔より少なくなってきたりして、サボってる、サボってるって言わないね。ちょっと業務量多くなってきたりからその分精力的に動かないと。

——人の交わる密度の人口密度が高いっていうことですね。

横田主幹…やっぱり問題があれば行くし、高校でも相談あれば行くしとかっていうそこは。

——まだ高校生から直接問い合わせとか、依頼が来たりはしないんですか？

横田主幹…先生を通してくるとやっぱり高校生もテーマで研究したいとなつて、物が借りたいとなればやっぱり先生経由でまた来るような感じでね。

——最初は先生経由で、一度そうなつてしまえば。

満島課長…そうそう。そうなると直接的に。

8 インタビュー後のフリートーク

——ここまで私の方から一方的に聞きましたが、何かこういうことは伝えておきたいとか、これは知ってほしいというようなことをお願いします。



満島課長・僕が思うのは、島外から来てくれる子どもたちがすごいのは、聞くと、ほんと自分で見つけて来てるんですもんね。親に聞くと、親もどうやってかわかんないけど、調べて私ここに行くとか、ここに決めたってことです。そういう時代なんだなって思いましたね。

特に道外からいらっしゃる子たちっていうのは、もう数ある周りの中からここを選んでくれてっていう。それはすごいなって思いますね。自分でこういう何もないことをわかって来てると思うんですよね。それでもここを選んで、馴染まない子もいるかもしれませんが、馴染もうとする力っていうのはすごいなと思います。これからどんどんそういう子たちが、地元の子はもちろんいながらも、来てくれたら。ずっと続けて来てもらえたらいいなと思います。

急にパタツと来なくなったりとかしたら、またどこか違う町で魅力ある学校できたのかなとか思うかもしれない。でもそういうふうにならないように奥尻高校の教育が魅力的になってくれたらいいなと思います。それは思います。

——当面この学校は大丈夫だと思えます。お金を頼りにしたり、従来型の大学進学のための教育だというようなやり方ではなくて、生徒が、満足できる高校時代を過ごせるように、自分たちで工夫できるようなやり方をしてるので、その部分で生徒さん来てますので。

満島課長・そうですね。個性相当あると思うな。学校の先生、多分ね。比較的内りやすい学校だから、入ってから自分次第でいろいろ可能性伸ばせるっていう。



——あと何か質問とかそういうことありますか？ ほかの高校と比べてどうなのとかそういうのは。

満島課長…離島の学校は周られたことかかってあるんですか？ 今回は奥尻にいらっちゃったっていうのは、やっぱり奥尻高校の活動どこかでお目見えしながら？

——私は、地域みらい留学フェスタという全国募集をする集まりで奥尻高校のことを知って、あとはインターネットで調べたり、噂を聞いてここに来ました。ここまで離島なのは私は初めてです。

満島課長…でもぜひこうやって先生みたいに興味持たれて島に来ていただくこともすごい僕らはありがたいことだなと思いますし、実際こうやって直接話することって多分、学校の関わりがなかったら多分なかったと思いますし、そういう意味ではつながりってすごいなって思いますね。

——奥尻高校さんが熱い思いを持っておられて、いろんな工夫なさっているから、これまでの大学の先生も来てるし、私も来てるんだろうと思います。

満島課長…そういう関係でいられば楽しいですね。

——本日はお忙しい中、ありがとうございました。

☆なお、高校生と奥尻町役場が協働した成果として日本酒「奥尻」が醸造された。
次のウエップ記事を参照していただきたい。

「奥尻で紡ぐ、新しい未来の可能性 ～日本酒「奥尻」の誕生編～」

<https://localhipponniji.com/5920/>